恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回はなしです。

~ 第 1 1 章 ~ < 秘密組織 >

きなこは薄れる意識の中で、3人の会話を聞いていた。

「明希ちゃんは、何ケーキが食べたいかい？」

「あのね、。えっと、苺が載っているのがいい。あと、チョコのも好き！」と明希は元気に答えた。

「そうか、じゃあ用意してもらわないとね。」とローブの者 = 黒帝 龍冴が言った。

「静かにしてね。後ろでおにいちゃんとおねえちゃんが寝てるから。」と碧河は明希に言った。

「うん、分かった。」と明希は言い、静かになった。

龍冴はそれを確認してから、連絡をし始めた。

「もしもし？ああ、俺だ。今、戻る所何だが、え！？王 凱歌は捕まえたんだが、

あの女刑事さんも一緒なんだ。いや、実は思っていた以上に事態が深刻でな。

普通の病院では難しいから連れてきた。どっちみち、説明しないとまずいだらう。

凱歌ともっとも関係がある人間なのだから。だから、“あれ”を始動させておいてくれ。

あと、王 凱歌は着き次第に検査後、出来るだけ早く手術する事になる。

女刑事さんの方は手術は必要ない。でも、検査はしておきたいので頼む。じゃあ、後で。」

と言って電話を切った。

きなこは、『自分がかなりヤバイのではないか』と思ったが、それ以上にホイさんは更に悪く、手術が必要と知り、何とか首を動かし、ホイさんの顔見た。

そして、傷ついたホイさんの右手を左手で握った。そのまま気を失った。

(暗転)

- 数十分後 -

きなこ達は、“本部”と呼ばれる所に着いた。

入り口では、かなりのセキュリティチェックがあった。

眼模チェック、声紋、指紋、サーモグラフィに全体映像でもチェックされた。

それだけで3分以上掛かってしまった。

やっとの思いで中に入った。龍冴は文句を言いながら、

監視カメラに“あかんべー”をして、地下に下りて行った。

中に入るなり、老人が待っていた。老人は車が止まるなり、状態を聞いた。

まるで救急センターの様だった。

老人と龍冴によって、担架に載った二人は別々の部屋へ入っていた。

握られた手をそっと龍冴と老人は外した。微笑みながら、。

残されて格好になった明希は、碧河に連れられて中に入っていた。この地下施設に、。

- ”本部”内 -

この”本部”と呼ばれた所はとても綺麗だった。

明希は会議室のような所で、碧河と別の青年と遊びながら待っていた。

そんな中、部屋に龍冴が白衣を着て入って来た。

明希はその格好があまりにも合っていたので、ビックリしつつ言った。

「おにいちゃん、お医者さんだったの？家のおじいちゃんと同じだね。

でも、手袋は取らないね。」と微笑んだ。

龍冴は微笑みながら静かに答えた。

「そうか、明希ちゃんのおじいちゃんもお医者さんか。

今、おにいちゃんとおねえちゃんの怪我を見ているから、もうちょっと待っていてね。」

と言い、手を振りながら部屋を出ていた。

- 1 時間後 -

部屋で明希が遊びに飽きて膨れっ面をして待っていた時、龍冴と老人が話しながら入ってきた。

明希は、「おにいちゃん、お帰り。」と嬉しそうに近づいてきた。

龍冴は「おにいちゃんだと色々と分からなくなるし、自己紹介しようか。」と言い、

少し間を置いてから順番を決めてから話し始めた。まず、龍冴からだった。

「俺の名前は、黒帝 龍冴というだ。龍冴にいちゃんと呼んでくれ。」と明希の前でしゃがんで言った。

「わしのう、プロフェッサーと呼ばれておる。まゝ～、科学者という意味じゃ。

プロフェッサーと呼んどくれ。」と老人は言った。

「私は、中峰 蒼凱と言います。皆さんからは蒼凱と呼ばれてます。

そうですね、。蒼にいちゃんとも呼んでください。」と優しく微笑みながら言った。

「僕はですね。前に言ったかもしれないけど、今は碧河 葵です。碧河と呼んでいいですよ。」と言った。

明希は、みんなの顔を順に見ながら微笑んで「みんな、大好き！」と笑って抱きついた。

「さあ、ケーキを持って来るから待ってて。」と龍冴は言い、部屋を出て行った。

明希は「ケーキ、ケーキ。」と飛び跳ねて喜んでた。他の者達は大きめのテーブルを出した。

龍冴がケーキが載ったトレイを持ってきた。その上にはショートケーキはもちろん

モンブランなど様々なケーキがいっぱい載っていた。

全員がテーブルに着いてケーキを分けてから、みんなで「いただきます。」と言い、食べ始めた。

みんな美味しそうに食べていた時だった龍冴の首に掛かっていたインカムが鳴った。

龍冴は慌ててインカムを付けて確認した。そして、立ち上がり部屋を出て行こうとした。

「あの女刑事さんが目を覚ましそうなんだ。ちょっと待ってて。」と言った。

それに対して「わしも行こう。」とプロフェッサーとついて行った。

明希は再び二人が居なくなってしまう事に少し悲しげな顔をした。

- きなこの病室 -

二人が病室に入ると、きなこがベットで唸っていた。そして、目を覚まし二人を見た。

「どうも、目を覚まされましたか？一応、応急手当はしましたが本格的な治療はこれからです。

色々説明をしないとまずいと思ひましてね。」と龍冴はきなこの耳元で小さく言った。

それを見ていたプロフェッサーは思い出したかのように言った。

「龍冴。お前もわしもちゃんとこの人に自己紹介をしていないのう。」

「あ！そうだったな。明希ちゃんには言ったけど、貴方には言っていなかったな。

えっと円道寺 きなこさんでしたね？俺は王 凱歌と君の担当医を務める事になった
黒帝 龍冴と言います。龍冴と呼んでくれていいですよ。よろしくな。」

「わしは、君達の副担当医を務めるプロフェッサーじゃあ。

医学については龍冴を超える者は世界にもそうはいない。

特定の分野の権威なら数人ぐらいはおるだろうが、総合的にはいない。

全ての分野で世界トップクラスだから、心配するな。」と二人は交互に自己紹介をした。

「あと、二人いるが一人はえっと今は、。あっ！碧河 葵だったか。碧河も仲間だ。

もう一人は中峰 蒼凱というのがいる。俺らの正体については、君と凱歌が完治してから、
追々お話します。いいですね？」と龍冴はきなこに同意を求めた。

きなこは首を縦に振った。

「体は麻酔をする前より調子がいいと思う。

しかし、もう一度治療しないとここに来る前に龍冴が約束した”戦う以前より調子よく”はならんから。
準備と説明が終わるまでここで安静にしておくれ。」とプロフェッサーは優しく言った。

「俺、明希ちゃんの所に報告してくる。心配してたからな。」と言い、部屋を後にした。

プロフェッサーと二人きりになったきなこは、なぜか不安になった、その時突然龍冴が戻ってきた。

「プロフェッサー！きなこさんに何もするなよ！きなこさんもこいつが何かしようとしたら

大声を上げるか、頭の横にあるスイッチを押せ。すぐに来るから。

プロフェッサー、本当に何もするなよ！！」と戸を強く閉め、龍冴は出て行った。

きなこは目でスイッチの位置を確認した。

「全く、わしを信用せい。実験台にするのはお前一人だけじゃよ。何があってもな。

じゃが少し興味はあるがのう。」とプロフェッサーは呟き、きなこを見た。

きなこは龍冴が戻ってくるまでの数分間は不安に包まれていた。

- 数分後 -

龍冴が資料を持って返ってきた。龍冴の後ろからは明希をつれた碧河が入ってきた。

「おねえちゃん、大丈夫？痛くない？」と明希はきなこのベットのそばに来て言った。

碧河も近づいて話しかけた。

「心配ありませんから、明希ちゃんも僕も居ますから安心してください。

でも、プロフェッサーにだけは気を許さないでください。危険ですから。

龍冴は世界一と言っていい腕の持ち主ですから安心してください。」と言った。

きなこはこの龍冴という者の腕は確かである事は話を聞く限り、自分の体の状態からも分かっていた。

そして、このプロフェッサーという者はかなり危険である事も分かった。

「さあ、俺は彼女に話があるから出てもらっていいかな？」と龍冴はみんなに出る様に言った。

みんなはきなこに挨拶をしながら部屋を後をしていた。

部屋には、龍冴とプロフェッサーそしてきなこだけになり、静まり返っていた。

少し間が空いてから龍冴が話し始めた。

「では、医者としてお話としたいと思います。これからの治療について。」

と龍牙は今までの笑顔から一転真剣な顔をして話し始めた。
正にさっきまでの優しいお兄さんから名医になっていた。

内容は、きなこが麻酔で寝ている間に検査を終え、「カプセル」と呼ばれる装置で簡単な治療を行なった事を説明した。

今後はその「カプセル」での治療が2、3時間入るだけであるというのである。

「えっ！それだけでいいんですか！？イテテ、、。その「カプセル」ってどんな物なんですか？」
ときなこは驚きつつ聞いた。

「「カプセル」とはSFみたいな話ですが、人間が持っている自己治癒力をぎりぎりまで高めて治療する装置です。

ここにしかないし、認可も受けていない代物ですがね。」と苦笑いして言った。

「外の人間にあの装置の良さなんぞ分かる訳がない。あの石頭どもめ。」

とプロフェッサーが怒って言った。

「プロフェッサーが「カプセル」の開発者です。でも、俺と共同ですがね。」と付け加えた。

「貴方の怪我は、自らの自己治癒力でしか治せません。ですから、あの装置を使いたいです。その方法でいいでしょうか？一応、許可がないとまずいですから。」と許可を求めた。

きなこは自分の体が治るならとその治療を受ける事にした。

そして、龍牙は別の話を始めた。

「きなこさんにホイと呼ぶ方つまり王 凱歌の事でお話があります。

本当は本人や凱歌の母親に言うべきですが、本人はあの調子ですし、母親の市江さんは心臓の疾患があるので、ストレスや不安などは掛けると良くないので、きなこさんを身内として治療方法の了解を得たいのですが、よろしいですか？」
と静かにそして真剣に言った。

きなこはその真剣さから、自分の時よりもなおホイさんの状態が深刻である事、命に関わる事を察した。そして、きなこは身内として聞く事にした。

「凱歌は1211により付けられた特殊なチップで、自分の意思に関係なくあのような事を行なっていました。その原因であるチップをまず取り外す手術が必要です。その後はきなこさんと同じ治療を行ないます。完治すれば、以前の王 凱歌に戻ります。しかし、、。大切な人を、特に貴方を傷つけた事で「心」を閉ざしてしまっている可能性があります。こちらの治療は体が完治してからになります。心配しないでください。必ず治しますから。」
と自信に満ちて瞳で説明した。

きなこは『ホイさんが元に戻る』と分かった瞬間、きなこの目に涙が静かに流れた。二人は静かにその光景を見ていた。そして、「ホイさんをよろしくお願いします。」
と力の籠もったはっきりとした声で言った。

龍牙は「分かりました。それでは今日はもう遅いので明日の朝、凱歌の手術を行います。きなこさんの治療も後日から行ないます。ゆっくり今日は休んでください。」と言い、
そして、はっきりとした声で更に言った。

「明日は1211によって消された人間としての「大切なもの」を取り戻します。」と。

二人は、「おやすみなさい。」と言い出て行った。

きなこは、誰も居なくなった部屋で静かに明日のホイさんの手術の成功を祈っていた。

- 会議室 -

碧河が眠ってしまった明希を見ていた。そして、明希の家族に連絡を入れていた。それに気が付いた龍冴とプロフェッサーは静かに入ってきた。

小さな声で龍冴が碧河に謝りつつ、碧河の電話が切れるのを待っていた。碧河は、OKの合図を龍冴に向けて出した。龍冴は明希をそっと抱き、部屋に連れて行った。しばらくして返ってきた龍冴はメンバーに了承を得た事を報告して明日のために早々に休む事にした。

- 龍冴の部屋 -

龍冴の部屋ははっきり言って必要最小限のものしかなく生活感が無かった。龍冴は、ベッドで寝転がってはいたが、眠る事は出来なかった。そして、おもむろに今まで外さなかった右手の手袋を外した。その手は、手首に大きな傷があった。まるで切断したかのような大きな痕だった。そして、傷の先には不自然に小さくなっていた。まるで別の人の手のようだった。右手をいとおしいように見ながら言った。「俺とお前のような惨劇はもう起こさせない！いや俺が止めて見せる。あの二人には俺らの分まで幸せになってもらわないとな。しかし、初めてだ。手術で胸がどきどきするなんて。これを”緊張”というだったな、。お前と逢う時の様だ。」そしてベッドから起き、部屋を出て行った。

明希は突然優しいピアノの音が聞こえたような気がして目を覚ましてしまった。とぼとぼと歩いていた時、一つの部屋から人の気配とあの優しいピアノの音がした。そっと見てみると龍冴がピアノの前に座っていた。部屋に入って龍冴は鍵盤を叩いていたが音はしなかった。不思議そうに近づいて行った時だった龍冴が明希に気が付いた。「ああ、ごめん。起こしちゃったかな？」と静かに言った。明希は首を横に振り、鍵盤を指差した。龍冴は何を言いたいのかすぐに分かり、説明した。「ああ、俺がピアノ出来るのが驚きかい？音はここから聞けるんだ。まだ始めて1年ぐらいしかしてないけど聞いてみる。下手だよ。」と言うと明希は嬉しそうに笑いながら頷いて椅子に座り、渡されたヘッドホンを付けた。しかし、この時龍冴は一つミスをしていた。実はピアノの音が小さな音だがスピーカーから出ている。二人はヘッドホンからも聞こえているので、気付かなかった。龍冴はもう一つのヘッドホンを付けてからピアノに向き直し、気を落ち着けた。そして、弾き始めた。弾き始めた曲は”アヴェ・マリア”だった。そう、王 凱歌と母との思い出の曲であった。これも偶然の女神の悪戯か、龍冴はこの曲を選曲した。荘厳と明希、龍冴の耳に響き渡った。そして、凱歌にも聞こえていたのかもしれない。龍冴は、今まで”アヴェ・マリア”をこんなに綺麗に弾けた事が無かった。まるで誰かが乗り移った様に龍冴の指先は静かに動いていった。

その身を誰かに預ける様に。そしてその雰囲気は優しい母のように明希は感じ見えた。

そう、凱歌の母、市江のように、、、。

弾き終え、明希はつい拍手をしてしまった。

それによって龍冴は何処かに行っていた意識が戻り、

明希に「もう夜も遅いから寝ようか。また、弾いてあげるからね。」と部屋へ行かせようとした。

その時龍冴はある事に気が付いたが無視し、明希が入ってきた扉から部屋へ行き寝かせた。

一人になった時、龍冴はゆっくりとピアノの鍵盤に触れ呟いた。

「この曲は、、、。思い出の曲なのか？」と明希が出た扉とは反対の別の扉の方を振り返った。

そこには、王 凱歌が立っていた。しかし、すぐにその場で倒れてしまった。

龍冴は凱歌を背負い、病室に連れて行った。

龍冴は喜びと驚きを隠しきれなかった。なぜならまだ体の自由が戻っていない、

しかも薬で眠らせていた凱歌がこのピアノのある部屋まで歩いてきたのである。

しかし、これにより”心の傷”は最悪の結末を迎えずに済む可能性を感じ、嬉しくなった。

廃人、植物状態を回避できる事を意味していた。この事はきなこには説明しなかった。

きなこも完治した訳ではないので負担を増やさない様にとの配慮からだった。

静かに凱歌を寝かせ、きなこの状態を確認しに行く事にした。

- きなこの病室 -

きなこは静かに寝ていた。ここには看護師が居ないので当直も自分達でするのである。

状態を確認し部屋から出てくると、プロフェッサーが部屋の前に立っていた。

プロフェッサーは龍冴が眠れずにいた事が分かったらしく、寝酒を勧めた。龍冴は付き合う事にした。

本当はプロフェッサーがお酒が飲みたかっただけなのかもしれない。

その席で龍冴とプロフェッサーは明日の手術について話していた。

話しの中で、龍冴は複雑な気持ちでいる事を告げた。

その内容は、凱歌からはある男と似た気配が感じられると言うのである。

その気配の持ち主と関係があったと思うと怖いらしい。

その男は龍冴の人生を狂わし、”大切なもの”を奪った男らしいのである。

プロフェッサーは科学的に調べる事にした。龍冴には内緒で、、、。

龍冴はプロフェッサーに勧められた一杯の日本酒でべろべろになってしまった。

龍冴はお酒が少ししか飲めないのである。

プロフェッサーに連れられ、部屋に戻るとそのまま熟睡してしまった。

「全く世話を焼かず。眠れないからといって歩き回るな。みんな起きてしまうぞ、、、。」

と微笑みながら出て行った。その眼差しはまるで親のようだった。

~ 第12章 ~ < 目覚めへの道 >

- 朝7時 -

龍冴は、二日酔いもなくすっきりと目が覚めた。そして凱歌の状態をチェックし、手術の準備を始めた。

プロフェッサーは、きなこを朝から”カプセル”に入れていた。

実は昨日、龍冴が来る前にきなこから凱歌の手術の前に治療を終えて

「ホイさんの手術を見守りたい」と相談され、龍冴に内緒で治療を行なう事にしたのである。

あと1時間できなこの治療が終了する。凱歌の手術は9時からだったので間に合う。

プロフェッサーは急いで龍冴の方を手伝いに行った。

龍冴はプロフェッサーが手術室に入ってくるなり睨め付けて言った。

「プロフェッサー、、、。ちゃんと治療をする時は担当医の俺に言ってくれよ、、、。

まあ、分かっていたし俺もそうしようと思っていたからいいが、、、。

でも、次はただじゃ済まないからな。」と云った。

「すまん。しかしよく分かったのう。まさか、立ち聞きしおったな、、、。全く。

おお、そうじゃ。忘れておるかもしれないがあの王 凱歌に感じた気配じゃが科学的に調べた。」

と頭を下げながら言った。

「科学的に調べたって？まさか、DNA検査をしたのか？大体どうして奴のDNAなんて持ってたんだ？」

と驚きを隠せずに言った。

「まあ、たまたまあつてのう。結果は知りたいか？どんな結果でも、、、。」と怖い声で言った。

「どういう意味だ？怖い事を言ってくれる、、、。って、まさかの結果が出たと言うのか！」

と最後の言葉に憎しみの籠もった顔で言い終えた。

「もし、その”まさかの結果”が出ていたとしたら、それを聞いたら凱歌の手術に手を抜くか？

抜くなら、そういう考えがあるならわしは言わん。決めるのはお前だ。」と静かに真剣に言った。

「俺は、、、。その人間が誰の子でもどんな人間でも、俺の力で助けられる人間は助ける。

それが俺の”大切なもの”を、全てを奪った奴でも！」と真剣で真っ直ぐな瞳で答えた。

「その言葉が聞きたかった。しかし、最後の”全てを奪った奴でも”は嘘になるじゃろう。

わしもそうは思っているも実際、それだけはできんからな。」と悲しみの籠もった瞳で言った。龍冴も。

「じゃあ、結果を言おう。でも、凱歌はその結果を恐らく知らんじゃろう。そして無関係だ。

これだけは分かって欲しい。じゃあ言うとするか。

DNA検査の結果は”99%親子関係あり”と出てる、、、。

そして、お前とも”共通点あり”と出てる、、、。

全く、”時の流れとは残酷だが、運命もまた残酷だ”。ついお前の嫌いな口癖が出てしまうのう。

じゃがこの口癖がぴったりの状況じゃ。」と更に悲しみが深まった。

暫しの沈黙の後、龍冴がおもむろに言った。

「だが検査結果によって俺達、より一層捻じ曲がってしまった凱歌の人生を正しい道に直さないと。

俺達二人の全てを賭けて。」

と優しくそして強い眼差しをプロフェッサーに向け、プロフェッサーは頷いた。

二人は誓いを新たに、手術の準備に再度取り掛かった。

- 1時間後 -

プロフェッサーはきなこの治療が完了する時間が近づいてきたので”カプセル”の部屋に向かった。

龍冴は凱歌の様子見と全身麻酔を施しに病室に向かった。

他のメンバー達は明希に凱歌が手術をする事を告げた。そして、応援を頼んでいた。

- ”カプセル”の部屋 -

部屋の中心には、大きな繭型の装置が置いてあった。

その中からは優しい光が隙間から出ていた。

プロフェッサーはコントロールパネルを確認し、治療完了を静かに待っていた。

数分後、溢れていた光が止み、装置の扉が開いた。

プロフェッサーはコントロールパネルで指示を出してから装置に近づき、
寝ているきなこを担架に移動させ、病室に連れて行った。

「しかし、きなこさんは手術前に目を覚ましてくるかのう？大丈夫だとは思いますが、。」
とプロフェッサーは不安を漏らした。

- 凱歌の病室 -

龍牙が病室に入ると、凱歌が縛り付けられているベッドの上で暴れていた。

龍牙は暴れる凱歌に静かに近づいていた。

凱歌は龍牙に気が付いたらしく龍牙に攻撃をしようとしたが、
縛り付けているためにほとんど動けなかった。

そんな凱歌を悲しげに見ながら、そっと龍牙は凱歌の耳元で囁いた。

「聞こえているかは分からないが言っておく。王 凱歌。

君を操る忌まわしきチップをこれから取り除く手術を行なう。俺は自分の命を賭けて君を救う。

そして、君達と一緒に1 2 1 1を倒す。君が何と言おうと俺は一緒に行く。

1 2 1 1の”真の”ボスに用があるからな。さあ、しばらく眠ってくれ。

起きた時は君の体は君の元に戻っている。しかし、完璧に治るのは体の自由が戻ってからだ。」

そう言うと、暴れる凱歌に麻酔を施した。

凱歌は麻酔により徐々にぐったりとした。そして、その顔は優しいホイの顔になっていた。

しかし、龍牙がしばらくしてから麻酔の効いたのを確認した時だった。

凱歌の体はほとんど麻酔の効果が見られなかった。

龍牙はすぐに凱歌の特殊な体質に気が付いた。

それは、麻酔の効きが非常に悪いという特殊な体質だった。

そこですぐに麻酔の効果がどれほどか調べてみた。

結果は通常の十分の一以下の効果しかなかった。

時間が経つにつれて徐々に効果が上がっていったが必要な効果が出るまで

相当の時間が掛かる事が判った。

龍牙は麻酔の効果を上げる薬を投与してから、凱歌を担架に移し手術室に向かう事にした。

- 手術室 -

手術室には先ほど龍牙により連れて来られた凱歌がぐったりとしていた。

まだ、麻酔の効果は十分ではなかった。

この事を相談をするためにきなこを迎えに行ったプロフェッサーの元に向かった。

- きなこの病室 -

眠っているきなこのそばにプロフェッサーが静かに優しい眼差しをして立っていた。

そこに龍牙が真剣な顔して入ってきた。

プロフェッサーはその真剣な顔に驚き、「何かあったのか！？」と声を上げた。

龍牙はプロフェッサーを部屋の外に引っ張り、凱歌の事を説明した。

それを聞き、プロフェッサーは初めの内は驚いていたが途中から考え込んでしまった。

二人は対策に頭を抱えてしまった。

凱歌の状態はきなこに説明していたよりもかなり緊迫していた。一刻の猶予もない状況だった。

これ以上治療が遅れると、彼らの技術でも治す事ができなくなってしまうのである。

それほど凱歌の肉体、精神は限界にしていた。

二人は決断を迫られていた。二人には二つの道があった。

一つ目は、凱歌に麻酔と麻酔の効果を上げる薬を併合で射ち、麻酔の効果が十分になるのを待つ。つまり、時間との戦いであり、運頼みだった。

二つ目は、一つ目の方法つまり科学療法に、別の方法を併合で行なう方法である。

しかし、その”別の方法”には科学的な根拠が立証されていない方法だった。

つまり、一か八かの賭けである。

二人はこの危険な二つの橋のどちらかを選ばなければならなかった。どちらも賭けである。

暫し考えた後、二人の意思は決まり同時に呟いた。「一か八か賭けるか、。。。」と。

そして、二人は行動を開始した。

龍牙は、凱歌に麻酔と効果を上げる薬を射ち、もう一つの方法の準備を始めた。

プロフェッサーは、凱歌復活に必要な二つの”鍵”を用意する事になった。

プロフェッサーは明希に手術室の声を聞き、話す事が出来るインカムを渡し、

「応援して欲しい。」と頼んだ。そして、もう一つの”鍵”の元へ。そう、きなこの元へ。

龍牙は静かに凱歌の体を触り、何かを調べていた。少々自信無さげに、。。。

そして、見つけた所に印を付けていった。それを全身に何ヶ所も行なっていった。

きなこは、プロフェッサーが着いた時はまだ目を覚ましていなかった。

プロフェッサーはそっと起こしてみる事にした。

すると、気持ち良く寝ているのを起こされたかのように不機嫌な声を上げ、

プロフェッサーめがけて拳が襲ってきた。

しかし、それを難なく押さえ、ぐずる子供を起こす様にそっと起こした。

きなこはさっきまでの不機嫌が嘘の様にはっきりと目を覚ました。しかし、理由は簡単だ。

あの”カプセル”という装置はある意味で母の胎内いるような安心感を得れるので、

その『心地いい感覚から覚めたくなくなる』という副作用的のものがあつた。

しかし、本当は自分で目を覚ますのを待つ方が気持ち良いが、

今は時間が無かったので無理やり起こしたのである。

「きなこさん、無理やり起こしてすまんがもうすぐ凱歌の手術を始める。

きなこさんには、こちらが合図をしたら凱歌に呼びかけて欲しいのじゃ。頼んでいいかのう？」

と目を覚まし、意識がはっきりしたきなこにプロフェッサーが言った。

「手伝える事があるなら何でも。でも、呼びかけるって？どんな事を、。。。」ときなこは聞き返した。

「いや、普通に凱歌を名前を呼んだり、要するに凱歌の反応が見たいじゃよ。」と説明した。

「分かりました。手術中は何処に居ればいいんですか？」

出来れば、見れたりできたらといいんですけど、。。。」ときなこは言った。

「見たいのか。結構見てられないぞ、好きな男の手術なんぞ。
それでいいのなら、これから案内しよう。来るがいい。」と歩き出した。

きなこはホイを”好きな男”と言われ赤面してしまった。
しかし、まだ自分の体の事を理解していなかったので心配だったが、
驚く事に凱歌を戦う前以上に調子が本当に良くなっていた。

きなこは内心龍冴が言っていた事が本当になった事に舌を巻くばかりだった。
そんな事を考えつつプロフェッサーを急いで追い駆けた。

プロフェッサーに連れられて入った部屋はモニタールームの様だった。
そして、入り口の真ん前にある大きなガラス窓からは手術室内が見えた。

そして、その部屋には碧河と明希そしてきなこの知らない青年がいた。
青年はきなこに近づき自己紹介をした。

「初めまして。私は中峰 蒼凱と言います。私も龍冴や碧河の仲間です。よろしくお願いします。」
と丁寧な挨拶をした。きなこはこの青年はとても真面目そうに見えた。
ある意味で普通の様に見えた。

きなこも丁寧な挨拶を慌ててした。
「初めまして。警視庁国際二課刑事 円道寺 きなこです。色々ありがとうございます。」と言った。
「いえいえ、私の仕事はこれからですから。」と微笑んだ。

挨拶が終わるのを見計らってプロフェッサーが蒼凱に言った。
「蒼凱、例のプログラムはもう使えるのかのう？使える様なら立ち上げておいてくれ。
わしも龍冴を手伝わんと。色々と問題が多くてのう。」

「それは心配ありません。昨日の内にテストも5、6回しましたから。
先ほど立ち上げておきましたよ。」と答えた。

きなこは、この会話の中で不安を感じた。『”問題”とは？』
「あのう、”問題”って？まさか！何かあったんですか！？」と不安の籠もった声で言った。
「心配はいらん。ほんの些細な事じゃ。命は関わらないこちらの問題じゃ。」
とプロフェッサーはある意味嘘を付いた。

そして、プロフェッサーはきなこにインカムを渡し、彼らが”鍵”と呼ぶ二人に説明をした。

内容は、チップを外した後、凱歌の神経がちゃんと反応するかの検査をするために
インカムを使って呼びかけて欲しいというものだった。

手術を終えてからの検査で異常が見つかること、
再び凱歌に手術のリスクを払わなければならないので、それを避けるためと言った。
そして、この呼びかけで凱歌の目覚めも変わると言った。

きなこも明希は自分達の声、言葉がこれからの凱歌に大きく関わる事を痛感した。
そして、その役目は自分達にしか出来ないと理解した。
二人は顔を見合わせ、大きく頷いた。同じ思いを胸に、。。

そんな事を知ってか知らずか龍冴は緊張していた。
遂に凱歌の体にもう一つの方法を行おうとしていたが、経験の無さと不安、
プレッシャーでいっぱいになりそうになっていた。

そんな時、プロフェッサーがそっと龍冴の隣に立った。
なぜか、プロフェッサーがそばに居ると龍冴は落ち着くのである。
プロフェッサーが見つめる先で静かに印を付けておいた所を再度確認しながら、針を刺していった。
そう、もう一つの方法とは体のつぼを使う方法だった。

確かに科学的には根拠はないが効果はある。

そして、全ての痛みを無くすつぼを抑えた。凱歌の麻酔の効きと合わせて確かめてみた。
効果は良好だった。これで手術が出来る。二人はほっとしつつ、手術に早々に取り掛かる事にした。
心の底から成功を信じ、凱歌の可能性を信じて、、、。今、凱歌の手術が始まった。

~ 第 13 章 ~ < 開放 >

- 手術室 -

龍冴とプロフェッサーの二人の他に看護師など複数の医師らが手術に参加していた。
まず、凱歌の首に付いているチップの状態をプロフェッサーが確認し、
モニタールームに居る蒼凱と共にチップに例のプログラムを送りこんだ。
これによりチップの自己防御機能を停止した。そして、取り外しに掛かった。
それからは、龍冴の腕の見せ所である。龍冴は静かにそして正確に手術を進めていた。
しかし、やはり手術している所が所だけに時間を掛かった。

- 2 時間後 -

手術は、凱歌の首にチップがどのように付いているのか、外す方法を検討していた。
チップは思っていた以上に危険な付き方をしていた。
頸椎（首にある7個の骨）の一つに刺さっていたのである。
もし、チップが直接脊髄に刺さっていたら抜く事は大変危険である。
少しでもずれれば凱歌の体は元には二度と戻らない事を意味していた。
しかし、ここで諦める事は凱歌の死を意味していた。
龍冴は冷静に頸椎にどのように付いているのかを見定めていた。
そして『どうするか』を龍冴は決めた。
「恐らく、このチップは脊髄までは達していない。頸椎を通して電気信号を送っているはずだ。
頸椎の傷をこれ以上広げない様に慎重に取り外しに掛かる。ここからが正念場だ。
気合を入れてくれ。」と龍冴は周囲に告げ、手を動かし始めた。
そして、凱歌の頸椎から、体から遂にチップが外されようとした。
あと少しで外れようとした時、龍冴の手が止まった。何か考え込んでいる様に、、、。
「龍冴。お前、あの事を考えておるのか？あの言葉は嘘だったのか！」
とプロフェッサーは龍冴を叱った。しかし、龍冴は言われてなお動かなかった。そして、、、。
「違うんだ、、、。これを外してしまえば確かに凱歌は自由になるが、
それで本当にいいのかなと思って。
凱歌の気持ちを考えていないのではないかなと思って、、、。」と静かに答えた。
そっと龍冴の肩に手を置きながら、プロフェッサーは諭す様に言った。
「前に言ったはずじゃ。凱歌もお前も死んでも罪は消えない。

生きている間にした罪の清算は生きている間にしかできない。だから、共に生きねばならない。分かっているはずじゃ。さあ、続けるんだ。今はそう思うかもしれないが、後で感謝されると思うぞ。」と優しくプロフェッサーは龍冴の肩に置いた手を引いた。そして、龍冴とプロフェッサーは共に顔を見合わせ微笑んだ。

「済まなかった。続けよう。」と言い、チップ取り外しを静かに慎重に続けた。

そして数分後、遂にチップは外された。

外させた後、様々な検査が行われ、つぼを抑えていた針を外してきなこと明希に龍冴は言った。

「インカムを付けて凱歌に呼びかけてくれ。」とモニタールームに居る二人は準備を始めた。

そして、二人は顔見合わせ、呼びかける順番を譲り合ってしまった。

そして、明希が意を決めて話し出した。

「おにいちゃん。明希とまた遊んでくれる？ねえ、起きて。」と優しく言った。きなこが続けた。

「ホイさん、今まで言えなかったんだけど、、。私、船木さんとの結婚、、。辞めたんだ。」

とホイに告白した。

龍冴は二人の言葉に凱歌が反応するのを見ていた時、

きなこの突然の告白に内心驚いたがそれは龍冴だけではなかった。

凱歌の耳にもしっかりと聞こえていたらしく、凱歌の体は”ピクッ”と反応したのである。

そう、全身が、、。これで凱歌の神経は脳からの信号を全身に送る事が出来る。

つまり、チップが付いていた頸椎の部分の神経は問題がなかった事が判明した。

その後も続け、”問題無し”と判断し、縫合を行なった。

外されたチップはプロフェッサーにより調べられる事になった。

縫合が終わり、凱歌は病室に連れて行かれた。24時間の監視の元で、、。

手術を終えた龍冴は手術室の前でへたれこんでしまった。

そこにモニタールームで見ていた人々が龍冴の周りにやってきた。

そして、彼らに龍冴は微笑んでVサインをした。まるでゲームに勝った子供のような笑顔をした。

明希は嬉しそうに龍冴に飛び付いた。龍冴は驚きつつ抱き上げた。

「おにいちゃんの手術は成功した。おにいちゃんが元気になったら連絡するから、

今日は久しぶりにお家に帰ろうか？ねえ。」と龍冴は微笑んで訊いた。

「ええ～。帰るの、、。でも、元気になったらまた逢えるなら、また来ていいんなら明希帰る。」

と少しさびしげに言った。

「いつでも遊びにおいで。連絡してくれればいつでも迎えに行くよ。

元気になったら明希ちゃんに連絡するからね。碧河、明希ちゃんを家に送ってくれ。

頼んだぞ。」と言い、明希を碧河に渡して手を振り、送り出した。

明希を送り出してからすぐに龍冴は部屋に戻っていた。

凄く疲れていたのを隠していたが限界がきてしまった様だった。

他の者も仕事に戻っていった。

きなこは不安だったが、ホイは面会謝絶だったので仕方が無く、施設内を探検してみる事にした。

きなこがうろうろしていると、蒼凱が話し掛けて来た。

「どうしたんですか？こんな所で？する事がないのなら、鈍ってしまった体を動かしますか？」

と不敵な笑顔で誘った。

「そんな所まであるんですか？確かに少し体を動かしたいですね。」と怪しかったが行く事にした。

～第14章～<目覚め>

きなこが案内された部屋には何も無かった。

あるのは部屋の角にそれぞれ置いてある柱のような機械だけだった。

不思議そうにきなこが蒼凱を見ると、蒼凱は何も言わず機械を起動させた。

機械は柱に囲ませた正方形の中を探索する様にカメラが動き出した。

きなこが驚きつつ見ていると、自分の目の前に胴着を着たマネキンのような人形が出てきた。

そして、蒼凱が言った。「何も言わず進めてすみませんでした。

この人形がきなこさんの相手をしてくれます。きなこさんの強さにより攻撃を変える人形です。

胴着に着替えてきてください。百聞は一見はしかずと言いますから。」

と言い、更衣室に案内し好きな胴着を使う様に言った。

きなこは自分のサイズの胴着を見つけ、着替えた。

更衣室から出ると蒼凱が待っていた。人形と共に。

「この人形は、コンピューター制御で動きます。

強さの方はコンピューターが相手つまりきなこさんのデータ、動きから判断します。

多種多様な武術を覚えさせています。ランダムに使ってきますので飽きないと思います。

一応、怪我をしない様に設定しているので危なくなると止まります。

一人とする時は、ここのスイッチを押して頂ければ、サーチして人形が出てきます。

辞める時は、“やめ”と言って頂ければ止まります。終わったらまたスイッチを押してください。

説明は以上ですが、何か質問とかありますか？」と蒼凱が説明した。

きなこは特に質問が無かったので、首を横に振った。その時、蒼凱が慌てて言った。

「強さは戦っている内に変わりますので自分で合わせる必要はありません。

毎回動き、強さは変わりますので、一度勝ったからといって次も勝るとは限りませんので

気を抜かない様をお願いします。」と付け加えた。

きなこは人形の前で構えた。それに反応して人形も構えをした。始めはきなこと同じ少林拳だった。

きなこ人形は互いに間合いを取りながら出方を見ていたが人形が先に攻撃してきた。

確かに人形はきなこの強さに対応しているらしくきなこ同等の力で攻撃していた。

きなこは『これは使える』と心の中で思いつつ、『隙を見せたら勝てない』と悟った。

そんなきなこの様子をしばらく見ていた蒼凱は「仕事があるので行きます。」と言い出していた。

出て行く直前で「あんまりやると龍冴達に怒られるのでほどほどにお願いしますよ。」と付け加えた。

きなこは簡単に返事をした。その時、きなこは人形に押されていたため、

しっかりと返事が出来なかった。それからきなこは一人、人形相手に鍛錬を続けた。

一方、部屋に戻っていた龍冴は1時間ぐらい休んでから、

プロフェッサーの所と凱歌の病室を往復していた。

凱歌が麻酔から覚めるまでかなり時間があったので、プロフェッサーの所で

チップの解析を見に行く事にした。

- プロフェッサーの実験室 -

プロフェッサーが頭を抱えていた。その珍しい光景に龍牙は動揺してしまった。
「プロフェッサーが頭を抱えるなんて！そんなヤバイものだったのか！？」と驚きの声で言った。
プロフェッサーは驚いたものの暫しの間の後、答えた。
「いや。違うじゃ。このチップの出所に問題があつてのう。
言いづらいのじゃが、、、。どうも、わしらしいのじゃ。」と静かにそして悲しげに答えた。
「はぁ～！プロフェッサーが出所ってどういう事だよ！ちゃんと分かる様に説明しろ！！」
と龍牙は曖昧な態度に怒った。その怒りに驚きつつ、プロフェッサーは静かに語り始めた。

「わしがまだここに入る前、お前が生まれ変わる前じゃった。
そう、45年前ぐらいかのう。このチップの構想を思い付いたのは。
このチップを考え出したのはわしじゃ。
じゃがこのチップは元々脊髄を損傷した人間の脊髄の代わりとして
体を動かせる様にする装置として考えたのじゃ。人と救うためののう、、、。
あの頃のわしとしては珍しく人間を救うものを考え出したんじゃ。
もしかするとその時から『人を救う事がしたい。』
今の『人を殺すものを作る事から手を引きたい』と思っておったのかもしれない。
それからしばらくしてからじゃった、わしが組織から逃げ出したのは。
チップの構想を書いた資料を燃やしたからのう。
じゃが、チップの構想が今になってから悪用されてしまうた、、、。
わしがあんなもんを思いつかなければ王 凱歌に。関係者に、、、。」と言い、悔しがった。
その姿を、その背中を静かに龍牙は見つめながら、
『俺には貴方の悲しみは分かるが、どうすればいいんだ。』と心の中で呟いた。
そっと龍牙はプロフェッサーの隣に行き、言った。
「元は困った人々を助けるための物だろう。
悔やむのなら、このチップを改良して世のためになる、
プロフェッサーがこれを考え出した当初の思いを完成させるんだ。
このチップを二度と悪用されないようにさ！
でも、あの頃のプロフェッサーがこんな物を考え出していたとはねえ～。
悪用して奴を必ず見つけて、”これが本当の使い方だ！”と見せ付けてやれよ。」
と元気つけようと龍牙は言った。
「お前に元気つけられるとは老いたのう。そうじゃのう。
”わしの未完成品を使うな！”と言ってやるわい。」と明るく言った。
二人は互いに頷き合い、チップの改良、製作者の調査を続けた。

- 2時間後 -

龍牙ははと気が付いた。きなこが手術の後どうしているのか、知らない事を。
慌ててきなこを探しに行く事にした。
しかし、きなこはこの施設をほとんど知らないの他のメンバーと居る可能性を考え、
メンバーにインカムを使って連絡をした。それにより、すぐにきなこの居所が蒼凱により知らされた。
龍牙が後で教えようとしていた”人形の部屋”だった。

- 人形の部屋 -

きなこはここで鍛錬を3時間も続けていた。

龍牙が部屋に入ろうと近づいただけできなこの気迫が感じられた。

そこで龍牙は静かに気付かれない様に気配を消して部屋に入った。

室内では、白熱した鍛錬をしていた。その戦いはまるで操られた凱歌との戦いの様だった。

きなこが人形を倒すのを待ち、龍牙は拍手できなこの勝利を祝った。

きなこは誰も居ないと思っていたのでビックリしてこちらに振り返ったので、慌てて言った。

「すまない。練習の邪魔はしたくなかったので静かに入ってきた。

しかし、凄いな。あれだけの怪我の後でこれだけ練習が出来たな、。。

俺だったらゴロゴロと休んじゃうけどな。」と驚きを含んだ声で言った。

「体が鈍っていたので、それで、。。

これからの1211との対決を考えると休んでいられなくて。」ときなこは答えた。

しかし、龍牙はこの言葉に『君は十分に強いと思うけど、。。』と内心思ってしまった。

「じゃあ、折角だからこいつと戦ってもらえるかな？」

こいつは今までの人形とは違って特定の間人を再現した人形で”コピーロイド”と呼んでいる。

そいつと戦って欲しい。そいつに勝てればその心配はほとんどいらない事が証明になると思う。

誰の”コピーロイド”かは秘密で。」と言い、機械をいじり始めた。

そして、インカムで話を始めた。

「蒼凱、聞こえるか？”コピーロイド”シリーズに例の奴、入れたか？」

それはちゃんとレベルアップしたのか？してあるけど分からない所がある！？」

分かった、確認してみる。きなこさんに使ってもらおう。だが、結果は後で聞かせるよ。じゃあ。」

とインカムを外した。どうも蒼凱と話していたようだ。

そして、話が終わってから数分するときなこの前に男性型の人形が黒づくめの服装で現れた。

龍牙がきなこに合図を出した。人形はきなこの出方を待っていた。大した構えもせず、。。

きなこはこの人形の行動を見て、『確かに今までの人形とは違う。

人に近い行動をする。この感じ、覚えがあるけど誰だったかな？』

と思った瞬間、人形は攻撃をしてきた。きなこの隙を悟って。

龍牙はそれを見て、「元になっている行動パターン、思考等が入っているから

相手の行動を見て動きを決めますし、

隙を見せるとやらせるから生身の人間と戦っているつもりで戦わないと負けます。」と教えた。

きなこはそれを聞いて、『確かに』と納得しながら戦った。

しかし、この攻撃のパターンには覚えがあった。

龍牙は心の中で『これに勝つと家庭は嬖天下になるかな？どっちになるか楽しみだ。』

と微笑んで見ていた。

- 数十分後 -

きなこ”コピーロイド”の戦いは白熱していた。

そんな中、二人の空中蹴りがぶつかり合った時、きなこは遂にこの人形のモデルに気が付いた。

それは、。。王 凱歌つまりホイだった。

確かにホイに勝てれば1 2 1 1との戦いについては安心できる。しかし、少し強すぎる気がした。

その疑問に気が付いたのか、言うのを忘れていたのか、急に龍牙が叫んだ。

「そうそう気が付いたと思うが、この”コピーロイド”は王 凱歌だ。

強さは、リミッター外し後の成長を計算に入れたものだから、

チップ付けられる前の凱歌の1.5倍ぐらいになっている。実際よりも少し強めに設定してある。

でも、生身の凱歌はきっと情が入って、本気を出さない。

でも、こいつは迷い一つ無いからチップの付いた凱歌に近い部分がある。

そこが最大の違い。」と強さについて説明した。

きなこは、説明を聞いてはいたが理解するほど余裕が無かった。

”コピーロイド”は正確にそして手加減が無かった。

きなこはだんだん腹が立ってきた。

自分とホイとの力の差が実際より強いと言ってもこれだけある事に腹が立ってしまった。

『ホイさんの足手まといになりたくない。』と強く思った。

その時だった急に体から力が出てきた。そして、この感覚は操られたホイと戦った時にもあった。

龍牙は急にきなこの動きが良くなった事に驚き、眼差しが鋭くなった。

そして、気が付いた。

きなこはリミッターを外しかけていた。咄嗟に大声で言った。

「きなこさん、その感覚が”リミッター外し”です！忘れないでください！

一度リミッターを外せた人は自分で外せる様になります。

でも、うまく加減できないと前の様に自分で自分の体を壊す事になります！

加減の仕方を今、覚えてください。」と指示したが、

『そう簡単に”リミッター外し”は操れないんだけど、、、』と思っていた。

しかし、龍牙の計算は脆くも外れる事になる、、、。

きなこはこの”リミッター外し”は理解はしたが”操る”というのが全く分からなかった。

まず、リミッターを元に戻そうとした。力を、気持ちを落ち着かせようとするのと体が元に戻る感覚がした。

しかし、それをしているほど余裕が無かった。力を抜くと人形は手加減無く撃ちこんできた。

そんな中で徐々に自分のリミッターの限界点を感じてきた。

その瞬間、限界点ぎりぎり高めた力で撃ちこんだ。

人形はついていけずに弾き飛ばされ、壊れてしまった。完全勝利の瞬間だった。

それを見ていた龍牙は、きなこのリミッターの限界点のを見つけ、

使いこなす才能に舌を巻くばかりだった。

何せ、”リミッター外し”を理解してから1時間ちょっと経っていなかったからである。

普通は、リミッターを外し入れだけで1日はかかるのである。

龍牙は段々きなこが恐ろしくなってきた。

これで他の武術を併合したりしたらと思うと凱歌が哀れになってきた。

”喧嘩になったら”と思うと、『俺が治療してやるからな。』と内心凱歌に向かって言ってしまった。

龍牙は先ほどの戦いの結果を蒼凱の伝え、才能についても簡単に話した。

きなこは”リミッター外し”という才能に目覚めた。但し、鍛錬が更に必要である。

疲れたきなこに着替えてもらい、とある所に連れていった。

- 凱歌の病室 -

きなこが連れてこられたのは、一度も入った事が無かった、凱歌の病室だった。

凱歌はベットに縛り付けられていた。それを見て、龍牙を鋭い目つきで詰め寄った。

「どうして、ホイさんがベットに縛り付けられているの！おかしいじゃない！」

と襟割りを掴まれてしまった。

苦しいながら、説明を始めた。

「ベットに縛られ付けられているのは念のためです。記憶が混乱して暴れたら困るので、。

もうすぐ、麻酔が覚めたら外しますので心配しないでください。

苦しいですけど、。。。」と弱々しく言うと慌ててきなこは手を離れた。

龍牙は首を押さえて咳き込んだ。

きなこは慌てて何回も謝った。龍牙も「いきなりこんな光景を見せて自分が悪い。」と謝った。

そんな事を知ってか知らずかベットで眠っていた凱歌が反応した。二人は慌ててベットの近づいた。

そして、ゆっくりと凱歌の目が開いていった。その瞳にはしっかりと色を取り戻されていた。

しかし、何かがおかしかった。

凱歌はベットの周りに居た二人の顔を見回し、

何かを言おうとしていたが声が出ていなかった。

凱歌の目に焦りに似た光が見えた。

きなこは麻酔から覚めたばかりなのでうまくしゃべれないと考えた。しかし、龍牙は違っていた。

龍牙は慌てて凱歌を起こし、喉元を触り声を出す様に指示した。

しかし、凱歌は必死な表情で声を出そうとしたが出なかった。

凱歌を再度ベットに寝かし、龍牙はきなこの腕を掴み廊下に連れ出した。

きなこ達に更なる悲しみが襲う事になった。そして、龍牙達の正体、過去が開かされる、。。。

- 続く